



お弁当広場で元気に遊ぶ遠足の学童たち



当クラブはお弁当の場所を清潔に保ちます



隣接の子供の森・冒険コースは子供たちの大人気



連日、近畿一円からの学校遠足で盛況です

8-4 SGS 卒業後の活動

先輩のご配慮もあり、引き続き保田先生の主催されている「ひょうご食農塾」でお世話になっている。月に一度の講義であるが、先輩諸氏のご意見も拝聴でき、SGS 時代と同様充実した日々である。

食と農と環境の問題について興味をもちだしたのは KCS に入学した頃からである。KCS では有機栽培研究会に入り、かつ、自分でも市民農園で有機野菜の栽培を始めていた。KCS を卒業するに当たり、次の進路について、たまたま SGS の先輩に相談したところ、有機栽培を本格的にやるなら、学長の保田先生が日本の草分け的な存在であり、SGS に入ったらどうか？というリコmendがあり、SGS に入学となった。

現在では、有機栽培はライフワークと考えるほどまでになったが、入学当初はそれほど深い目的があったわけではない。しかし、この選択が大きく我が後半生を決定したと思っている。(ちょっと大きいですね！)

特に入学後に選んだ自主研究「有機栽培圃場の生き物たち」で実際に圃場にいる生き物を観察するうちに、自分の知らない世界があることに気づき、昆虫や小動物という存在を通して見る世界が、自分の世界観を根本的に変えるきっかけとなったように思われる。

KCS では福祉文化にいたが、「福祉とは」という問いに、圃場の生き物たちを観察する世界に、その「解」があるように思われる。いろいろな生き物がいて自然界が成り立っている。どの生き物が欠け

ても、他の生き物に影響が出る。それぞれがかけがいのない存在であることに気付く。お互いの存在を認めあい、つつましく生きていく事の意義を理解できるように思われる。

KSC 時代からやっていた「むかしあそび研究会」での活動は、幼稚園・小学校・児童館・障害者福祉施設などを舞台として、子供たちと遊びながら活動が続いている。むかしあそびの持つ力を利用して、次世代を担う子供たちの健全育成につなげられたら幸いと思っている。グローバルな世界になって、ますます求められるのは日本人としてのアイデンティティではなかろうかとも思われる。



児童館での活動



夏祭りでの活動

市民農園での有機栽培は小生にとっては生き物観察のフィールドであり、栽培方法の実験場であり、仲間との交流の場でもある。安全な農産物の価値は栽培体験のない人にとってはなかなか理解できないものである。もっと市民農園での活動が盛んになり、有機農産物の価値が広く認知されるようになれば、有機農業がもっと普及して、次世代に安全な食料を供給できる圃場と世界に誇れるような自然を残せるのではないかと、思っている。

小生の母方の爺さんは、日露戦争で金鵄勲章をもらった英雄であったが、第二次大戦で、全てを失い小生宅の離れに住んでいた。多分経済的には苦しいものであったと思われるが、いつも超然としていた。インクを水で薄め小さな手帳に何かを記していた。めったに笑わない人であったが、中学の修学旅行で買ってきたみやげには、「ニコッ」とした。

ときどき、その時の祖父の顔と凜とした背中を思い出す。小生も、かくありたいと願いつつ。



市民農園の仲間たち



ジャガイモの収穫

4期生 高木 良治

8-5 ひょうご安心ブランド「こうのとりのお米」の共同購入活動

「こうのとりのお米」の販売は、2005年から始まった。神戸市西区竹の台小学校で行われる「食と祭」というイベントがあり、ステージに立ち SGS で何か話をしてくれないかという相談が兵庫県農政環境部から持ちかけられた。我々は保田先生の下で勉強をしている“学究の身？”であり到底人前で話すようなことは未だ出来ないとしてお断りした。

しかし、「食と祭」というテーマに沿った施設参加という形で、ステージでなく校庭のテント・ブースで有機農産物を販売することにした。検討の結果、兵庫県では「おいしいお米を食べよう県民運動」が行われており、その主旨に沿った「こうのとりのお米」を販売することにした。

幸せを運ぶコウノトリで秋篠宮悠仁親王のお誕生を祝いながら・・・。



「豊岡でコウノトリを育てることに絶対必要な農薬を使わない田圃で作った「こうのとりの米」は売れていなかった。保田先生指導の下で作られたコウノトリ米である。神戸で PR すべく 2 キロ詰め 200 袋を根岸謙次氏に注文した。一方、県庁から「おいしいお米を食べよう県民運動」の幟 5 本とコウノトリ郷公園からパネル 10 枚を借りだした。「おいしいお米を食べよう県民運動」事務局より頂戴した青色とえんじ色の布製化粧袋に入れ、2 キロ詰め一袋 1200 円で販売した。しかし、70 袋しか売れず、持ち帰りの重さに泣かされた。SGS の仲間に購入依頼する一方、県庁の職員にも依頼したところ意外に注文が多く仲間の分を慌てて削減した。

完売はしたものの送料が意外に高く予算間違いで帳尻は赤字となり、SGS の会計に面倒を見てもらった。

なぜ売れなかったのか？

- ② ウノトリ米は知られていなかったこと。
- ② 農薬の危険性に対する認識が不十分であったこと。
- ③ 慣行栽培米の市場価格より 400 円位高かったこと。
- ④ お祭りに来る人は重たい物は買わない事等反省しきりであった。

かくて、初年度のスタートは失敗であったが、「こうの



販売に協力した 1～3 期生